

ほなひ歴史通信

第98号

2021（令和3）3.1

漱石と枕水

表題の漱石は、言うまでもない近代日本の大文豪夏目漱石（本名夏目金之助、一八六七～一九一六）の雅号、また枕水は旧宮川村の第一六代村長齋藤勇之介（一八八五～一九六八）の雅号である。実はこの二つの号は、ある一つの言葉に由来している。

中国には、古来より「枕石漱水」という言葉がある。意味は、川の流れに口をすすぎ、石を枕にして眠るというもののだが、西晋の時代（二六五～三二七）孫楚（そんな、晋の人）が間違つて、「漱石枕流」（石に漱（くちすす）ぎ、流れに枕（まくら）す）と言つてしまった。しかし孫楚は間違いを指摘されても、その誤りを認めず、「石で口をすすぐのは歯を磨くため、流れに枕するのは汚れた話を聞いた耳を洗うためだ」と言い張り、頑固にこじつけてしまった、という故事に由来するものである。

漱石は、この頑固者を意味する故事に深く興味を持ったのかも知れない。明治二十二年（一八八九）八月、学友と房総を旅行し、九月その紀行漢詩文『木屑録』を著して、親友の正岡子規に贈り批評を求めた。その『木屑録』の表紙に「漱石頑夫」と署名した。これが「漱石」という雅号を初めて使ったものと言われている。このときは頑固者を意味する「漱石」に更に「頑夫」と書き添えている。如何なる心境であつたろうか。漱石二十二歳の時である。

子規（本名正岡常規、一八六七～一九〇二）は、明治十六年郷里の松

山から上京し、十七年には漱石と同じく東大予備門に入學している。同級生の二人は、このころから顔見知りの間柄だつたと思われるが、親しく交際を始めたのは二十二年一月からであつたという。子規は、二十一年から二十二年にかけて詩文集『七艸集』を書き上げ、友人たちに廻覧し感想を求めた。漱石は、読後の所感を書き、それに九首の七言絶句を添えて礼讃した。このように漱石と子規は互いに刺激し合い、それは作家活動の原動力になつたと言われている。因みに、「子規」はホトトギスの異称である。

齋藤勇之介は明治十八年生まれで、東京の錦城学校を卒業し天文氣象を学んだ。帰郷後は農業の傍ら著述をなし、文筆に長じ、社会奉仕に貢献、明治四十一年頃からは政治活動に身を置き、昭和十年（一九三三）九月県会議員に当選、同十七年七月には宮川村長に就任した。詳しい事績については『大子地域の旧町村長事績集』を参照されたい。

勇之介が「枕水」と号したのはいつ頃からかと言うことは定かでないが、大正八年（一九一九）十月に勇之介が編集発行した『茨城県久慈郡保内郷土史』には、枕水の号が記されている。ここからは推論になるが、勇之介は、漱石が亡くなった大正五年の頃には、既に大文豪夏目漱石のことは十分に知っていたであろう。そして、「漱石」という雅号が「漱石枕流」という故事に由来すること、その言葉の意味などを知り、自分も「枕流」を「枕水」に変えて、雅号にしようと思つたのかも知れない。枕流も枕水も川の流れに枕するという同じ意味であり、頑固者を意味する故事なしでは考えられない言葉である。だが、だからこそ雅号には面白いのかも知れない。

参考文献

小宮豊隆著『夏目漱石』（全三冊、一九五三年、岩波書店）

『大子地域の旧町村長事績集』（令和二年、大子町教育委員会）

（井上和司）

大子の野球人

赤津康明

「めざせ甲子園」。大子清流高校の校庭に掲げられている六文字には、すべての高校球児の夢が集約されている。この稿が発行される頃には、去年は中止となった甲子園球場での選抜高校野球大会が、無事に開催されているだろうか。「春はセンバツから」という言葉が、今年は現実のものとなるよう、心から願う。

さて、大子町の歴史を振り返ると、何人かの野球選手の名が浮かぶが、なかでも石井連蔵、豊田泰光の両氏は、別格の存在だろう。今は亡き偉大なる野球人について記すのは僭越と思いつつ、ファンの立場から、改めてお二人の功績の一端に触れてみたい。

く上小川から神宮へく

昨年の一月、野球人としての最高の栄誉である野球殿堂入りのニュースのなかに、特別表彰として石井連蔵氏の名前があった。町内頃藤（旧上小川村）出身の石井氏は、少年期から野球に長じ、自著『おとぎの村の球投げ』（三五館）には、自宅近くの小学校の校庭で仲間と白球を追った楽しい思い出が綴られている。

やがて、学生野球の父と称される飛田穂州氏と同様に水戸一高から早稲田大学に進んだ石井氏は、投打の中心選手として活躍後に若くして監督に就任し、伝説となった昭和三十五年（一九六〇）の早慶六連戦などで辣腕を振るった。選手時代の勝負強さや監督としての厳しい指導に関して数々の武勇伝が残されており、教え子には、元プロ野球選手で現早大監督の小宮山悟氏など多くの名選手が並ぶ。晩年、自身の名前を冠した大会で、故郷の少年野球チームを指南した際の熱血ぶりは、今でも語り種となっている。

石井氏が超満員の神宮球場で胴上げされてから、長い年月が流れた。この間、野球をはじめ各種競技のメッカである神宮外苑では、数々の名勝負が繰り広げられ、歴史と伝統が積み重ねられて

きた。そのなかでも、石井氏が残した記録と記憶は、未永く語り継がれる特別なものであると思う。

く水戸經由、博多行きく

郷土出身選手の双璧の一人である豊田泰光氏は、昭和二十七年の夏、水戸商業高校の遊撃手として甲子園に出場した。開会式で選手宣誓を行うという大役を担ったのは、その後のプロ野球界での華々しい活躍を予告していたかのようなのである。

高校卒業と同時に福岡市を本拠地とする西鉄ライオンズに入団した豊田氏は、新人の年から頭角を現し、三原監督のもと野武士集団と称された黄金期のチームで主軸を担った。稲尾や中西など個性豊かな名選手たちと共に、大舞台で抜群の実績を積み重ねた。私は、豊田氏の現役時代の勇姿を目の当たりにすることはできなかったが、引退後の解説者としての明快な語り口や新聞に寄稿した切れ味鋭い論評が大好きだった。西鉄の本拠地であった平和台球場は既に姿を消し、その跡地が公園となっている今では、大子から水戸を経て、遙か遠い博多の地で勇名をはせた足跡に、悠久なるロマンを感じずにはいられない。

余談だが、豊田氏は昭和三十三年に「男のいる街」という作品で、プロ野球選手として初めてのレコードデビューを果たしている。作曲者は、生涯にわたり親交の深かった吉田正氏であり、日立市にある吉田正音楽記念館に行くと、当時の逸話を楽しそうに語る豊田氏の映像と共に、その美声を聴くことができる。

くそして、未来へく

いま、季節は弥生三月。いわゆる「球春到来」である。今度のシーズンには、どんな新たな選手が登場するのだろうか。この町から、石井氏や豊田氏のような天才が、いつの日にか誕生するだろうか。感染対策で神経を使う日々が続くなか、町内出身選手の活躍を想像するのは、大きな楽しみの一つである。

（大子町副町長）

芦野倉地区に残る中世城館跡と棟札

五十嵐雄大
野内智一郎
藤井 達也

芦野倉地区には現在四か所の城館遺跡が確認されています。芦野倉城は、字御城と呼ばれるところにあります。現況は、宅地と畑になっていますが、北側の一部に土塁と堀跡を見ることが出来ます。堀ノ内館は、果樹園になっていて、堀跡と思われるへこみと五メートルの切岸と呼ばれる人工的な斜面が確認できます。字館ノ沢には、堀切が一本残っています。字戸中は、山上に横堀や郭などの明確な遺構を見ることが出来ます。芦野倉一帯を治めていたのは、木澤氏と伝えられています。

左下は、「水府志料附録」にみられる慶福寺の棟札の文面で、大旦那として慶泉、明什という人物が記されています。また、大日本国奥州代續木澤源五郎の名も記されており、これらの人物が阿弥陀堂を造立したと考えられます。記された年号は永享八年（一四三六）で室町幕府第六代将軍、足利義教の治世のものです。今は同地に慶福寺はありませんが、芦野倉地区付近を代々、木澤源五郎を名乗る一族が統治していた可能性があります。大旦那慶泉は、棚倉町にある八槻都々古別神社の修験に関わりがある人物と思われます。芦野倉は白河結城氏と関係が深い八槻社の影響を受けていたのではないのでしょうか。

永享年間の棟札史料は県北地域には非常に少ないので、貴重なものといえます。このような史料から、中世の大字町域を知ることが出来ます。（五十嵐・常陸太田市在住、

野内・常陸大宮市在住、藤井・水戸市在住）



初めての皇室来大とレスリング

藤田貴則



左から2人目が三笠宮殿下、3人目が妃殿下

大子町において歴史上初めてお迎えした皇室関係者は、昭和四十二年（一九六七）の三笠宮殿下・妃殿下である。それまでは、光圀や斉昭などの水戸徳川家関係者は幾度となく大子を訪れているが、皇室関係者をお迎えすることとはなかった。

昭和四十二年三月、旧大子中学校体育館（現在の中央公民館）を会場に、「三笠宮殿下御臨席記念 全日本実業団対抗戦・全日本社会人アマチュアレスリング選手権大会」が開催された。

皇室関係者の来大は、令和になった今でも決して多くはなく、天皇陛下におかれては、昭和五十一年の全国植樹祭まで待つことになる。

三笠宮殿下・妃殿下をお迎えしたことは、『大子町史 通史編 下巻』に記述されていない他、残念なことに詳しい資料も残されていない。そうした中、今回掲載している画像が大子町立中央公民館歴史資料室に保管されてい

ることがわかった。大子の歴史上、抜け落ちてはいけない貴重な一ページとして『ほない歴史通信』に掲載することとした。当時は、昭和四十九年の茨城国体開催が内定し、大子町はレスリング競技の候補地であった。そのプレ大会として全日本社会人アマチュアレスリング選手権大会が、茨城県レスリング協会や大子町体育協会などの協力のもと開催された。しかし、国体本番では、実施競技のなかった笠間市にレスリング競技会場が移り、大子町では山岳競技が開催された。

昭和四十九年の茨城国体では、小祝仁晃監督率いる大子一高レスリング部の菊池通が優勝、藤田良穂と菊池利男が準優勝と大活躍をし、茨城県の天皇杯獲得に大きく貢献をした。

令和元年（二〇一九）の茨城国体開会式では、菊池通が県代表の炬火ランナーとして笠松運動公園を走った。また、今年に延期されている東京オリンピックでは、大子ジュニアレスリングクラブ指導者の藤田光希が聖火ランナーとして走る予定である。

さて、三笠宮殿下・妃殿下の来大時の画像を見ると、大子町の一大イベントとして催されたことがうかがえる。



殿下・妃殿下を乗せた車列と国旗を振る大勢の町民 役場付近

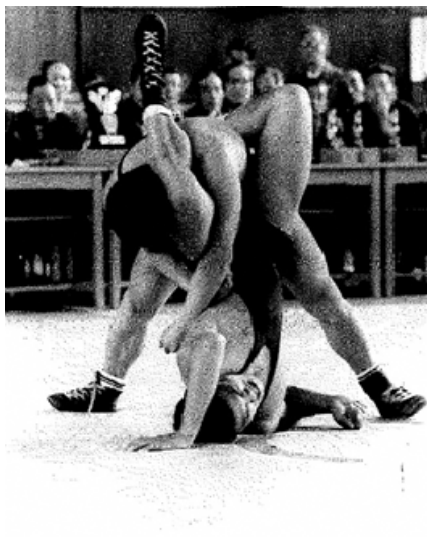


お手植えの梅の木（平成 29 年 3 月筆者撮影）

しかし、梅の木は枯れてしまったが、この時蒔かれたもう一つの種であるレスリングは、茨城県立太子一高レスリング部、太子清流高レスリング部、太子ジュニアレスリングクラブと引き継がれ、全国や世界で活躍する選手を輩出し続けている。令和の今、大輪の花を元気に咲かせている。

太子町初の皇室関係者である三笠宮殿下・妃殿下をお迎えし開催した全日本社会人アマチュアレスリング選手権大会を機に、同年の昭和四十二年七月に設立された太子町レスリング協会は、今もなお存続し活発に活動を行っている。

レスリング大会開催にあたり、レスリングマット一式が町より太子一高へ寄贈され、試合会場では、ひな壇に大会総裁である三笠宮殿下や町体育協会会長である国谷順一郎町長の他、県レスリング協会役員や町体育協会役員などが顔をそろえている。祝賀会は「ホテル奥久慈」（大字池田）において盛大に開催された。殿下・妃殿下の移動時はパレードの様相で、一目見ようと子供から大人まで大勢の町民が沿道を埋め、小旗を振って歓迎した。また、袋田の滝へも足を運ばれ、そこには「三笠宮崇仁親王殿下観瀑の地」の記念碑がある。さらに役場庁舎前で記念植樹をなされ、お手植えの梅の木は毎年綺麗な花を咲かせていたが、惜しいことに梅の木も一昨年に枯れてしまった。丈夫なはずの梅が何を憂えたのか、非常に残念なことである。



試合と会場の風景

太子町レスリング協会は、この素晴らしい歴史を糧に今後もスポーツ文化の振興、ジュニア選手の育成に邁進していきたい。（太子町レスリング協会会長）

「大子」呼称の変遷

藤井 達也

「大子」という言葉は町内の大字の一つであると同時に、町域全体を指す地域呼称としても使われています。しかし、もともと「大子」は町域全体を指す言葉ではありませんでした。大子町域を示す言葉としては、「依上保」「保内」「保内郷」が使われ、「大子」はその中の一地域という位置づけでした。それでは、「大子」という言葉はどのようにして、町域全体を指すようになったのでしょうか。「大子」呼称の変遷を追ってみます。

「大子」という地名が初めて史料上に現れるのは、戦国時代の最中である永正十四年（一五二七）のことです。関彦三郎という武士に「たいこのうち北宿」の地を与えるという表現が出てきます（「水府志料」）。大子という場所は、町域を縦に貫く「依上道」と太田・岩城方面と那須を結ぶ道（後の「東浜魚荷の道」とが交錯する交通上の要衝であり、戦国時代には町場（宿）が開かれていたようです。しかも、「北宿」という表現から考えると、「南宿」など別の宿場が存在していた可能性も指摘できます。また、本史料から、「大子」は戦国時代から「だいご」という音で読まれていたことがうかがえます。しかしながら、ほぼ同時期の永正八年に作られた大子町域を構成する二十四の村の名前を書き上げた史料（「八槻文書」）には、「大子村」という言葉は見られません。おそらく、この時期の「大子」は一つの村として独立していたのではなく、町場周辺の地域を指す呼称であったようです。

この「大子」の地に根を下ろした武士の一人が益子氏でした。「志摩守」を名乗る益子氏の姿が、戦国時代末期から江戸時代初期の史料に見られます。天正十三年（一五八五）に建立された愛宕

山白雲寺（現在廃寺）の棟札には、「益子志摩守」の名前が見え、後に大子村の郷士となる益子氏が、地域の寺社の建立に関わっていたことがわかります。この益子氏等を中心とした「大子」地域の武士は、天正十七年のものと思われる古文書では「大子衆」と呼ばれています。この古文書では、大子町域全体を指す「保内衆」と区別して「大子衆」という言葉を使っており、戦国時代後期には「大子」という独立した地域が成立しつつあることがわかります。この傾向は江戸時代に入ってから強まります。益子志摩守は、紀州高野山に自身の生前供養のための札を奉納しました。元和六年（一六二〇）に奉納された札の記録には「常州保内タイコ村」とあり（常陸日月牌過去帳）、江戸時代初めには「大子」地域は「大子村」として独立していたようです。

こうして独立した村として成立した「大子村」ですが、江戸時代にかけては、主に「保内」（江戸時代後期には「保内郷」が地域呼称として使われていたため、依然として地域全体を指す言葉ではありませんでした。しかし、十九世紀初めの頃には、「此村保内の街にして、近村此所に至り、市塵（みせ）をなすの地なり」（「水府志料」）と書かれる通り、地域の中心的町場へと発展していたようです。そのためか、「大子村」は地域の中心地域とみなされるようになります。享和元年（一八〇一）から翌年にかけての、水戸藩領内の支配管轄区域の一つとして「大子組」が誕生し、郷士益子氏の屋敷地に大子陣屋が置かれます。「大子組」は、大子町域を中心とした四十三村を含むもので、ここに町域全体を指す呼称としての「大子」の使用が始まります。

こうした戦国時代から江戸時代までの「大子」地域の宿場の拡大・発展があり、大子町域全体を示す「大子」という呼称が誕生したのです。明治時代に入ると、大子町域が「大子」として表現されることが増え、昭和三十年（一九五五）の一町八ヶ村の合併による大子町の誕生で正式名称となりました。（藤井達也）

『常陸国北郡里程間数之記』と大生瀬の地名

齋藤仁司

「大生瀬邑 下ノ宮界ヨリ内大野界迄 二千四百六十四間
此町四十一町四間 北下野宮邑 上町エ十三里 下町エ十四里
南大生瀬邑 山鳥艸 沢又 土ハシ四間 鎮守愛宕山 熊ノ久保
外大野ヘノミチ 二ゾウ 土ハシ一間 弓取前 土橋三間 右下
リ取付ヨリ弓取前迄 下リ取付迄 弓取峠取付ヨリ峠道登リ 北
向前 土橋六間 中坪 土橋二間 日照坪 キチノウ□土ハシ
堺田 板橋五間」

(注 □は判読不明な文字)

これは、大子町史編さん委員会発行の大子町史料別冊Ⅰ『常陸国北郡里程間数之記』の一〇二頁から一〇四頁の絵図を略し、文字のみを拾ったものである。

JR水郡線と久慈川に架かる嵯峨草橋を過ぎ、一般県道常陸太田大子線を進み、月待の滝のカーブを曲がると大生瀬地区に入る。さらに、県道を二キロメートル進むと打越地区に入る。この打越地区と内大野の手前の日照(ひしゅう)地区との間にある峠を弓取峠と言う。現在の道路は新たに開削されたもので、昔は今より約二〇メートルも高所に位置していた。

この他に、弓取、弓取前、弓取坂の呼称が残っている。

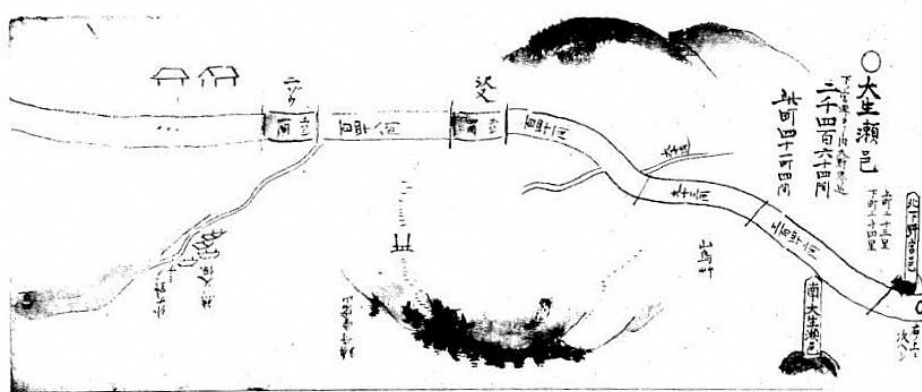
この地に、残されている言い伝えを紹介する。五七、八年前に父親から聞いた話では、陸奥国への道中の際に、源八幡太郎義家がこの地を訪れた時、馬上から弓を取って矢を放ったと言い伝えられているのが弓取。さらに、矢が放たれ越えて行ったのが打越。その矢が着地し、それを祀ったのが矢祭山で、矢祭の地名の由来と聞いている。

真偽についてはわからないが、とても興味深い話である。

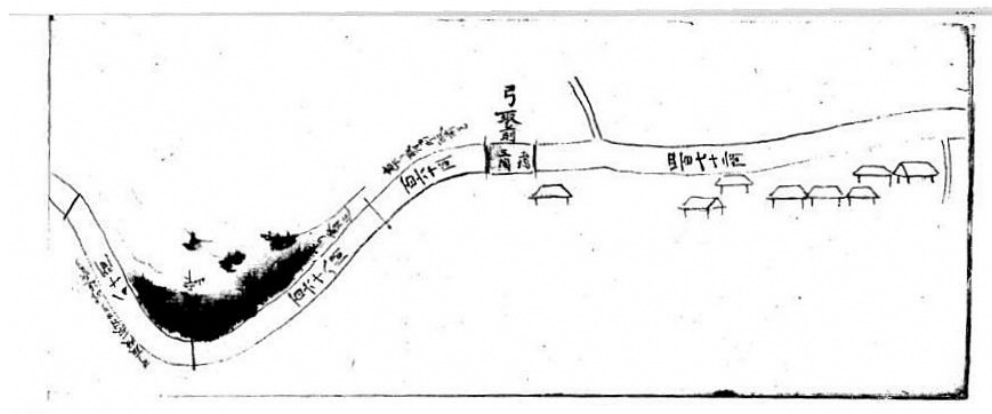
なお、『常陸国北郡里程間数之記』にある地名と土橋、板橋等の文字から小川や沢の位置は現在も変わっていないと思うので、絵図とともに見るととても身近に感じながら、昔日に思いを馳せて読むことができる。

読者の皆さん、自分の地域を読んでもみるのもお勧めである。

(大子町大生瀬在住)



『常陸国北郡里程間数之記』102 頁



『常陸国北郡里程間数之記』103 頁

【資料紹介】「茨城県久慈郡依上村々勢要覧」（昭和十一年）

木澤源一郎さん（大子町芦野倉）から大子町教育委員会に寄贈された資料「茨城県久慈郡依上村々勢要覧」（以下「要覧」と略）がある。発行は昭和十一年（一九三六）八月。そこには、「主トシテ昭和十年ノ事蹟ニ基ケルモノヲ調査シ」た内容が盛り込まれている。自治体それぞれの市勢要覧、町勢要覧、村勢要覧の発行が一般化するのには、第二次大戦後、それも町村合併促進法（二十八年公布）によって町村合併が強力に推進され、全国に新市町村が誕生して以降のことである。新生大子町の場合も、「昭和三三年版」の「大子町勢要覧」が最初である。したがって、本「要覧」のように戦前昭和期の発行ともなると稀であり、少なくとも大子地域を構成する旧九町村においては『昭和九年度 大子町町勢一覽』に続く二例目であり、極めて貴重なものであると言ってよいだろう。

本「要覧」は冊子体ではなく、折本両面印刷の形をとっていて、裏面には所持者であった「木澤平藏」の署名がある。木澤さんの祖父であり、昭和十六年一月から翌十七年五月まで依上村長を務めた平藏さんのもとには、各地に出征した兵士から多くの絵葉書が届けられていた。終戦後のある日、木澤さんは、父親敏夫さんが進駐軍の追及を避けるため戦争に関わる大量の写真や手紙類、書物等を焼却しているのを目撃している。本「要覧」は、敏夫さんの目の届かないところに保管されていたため焼却を免れたとも言う。今日、目の目を見た資料にまつわるエピソードである。

さて、「要覧」の構成を紹介しよう。表紙を開くとまず「依上村略図」が掲げられ、そして「疆域広表」「沿革」「地勢」「広表」「面積」と続く。次いで、昭和十年時点での村の実状を統計数字等によって示す「土地及人口」「生産物」「官公署及学校」「交通」「村吏員及名誉職」「選挙有権者数」「基本財産」「財政」「学事」「衛生」

「兵事」「社寺」「警備」「各種団体」等の項目が並び、最後が「名所旧蹟」となっている。こうした項目立てについては何らかの雛型があったのではないかとも思われるが、定かでない。

当「要覧」から読み取れる村の実情の一端を示してみよう。人口は、三四六六人である。人口は昭和十年の国勢調査からもつかめるが、「要覧」からは「業務別」人口も判明する。農業一四七二人、商業三二人、交通業一三人、工業三人、その他八七人である。有業者の九割以上を農業従事者が占める典型的な農業地帯であることが確認できる。他面で、総計二五万円余に及ぶ生産物の構成比をみると、米（三〇％）、葉煙草（二％）、大小麦（九％）を三本柱にした農産物が六九％、養蚕四％、家畜及び家禽一％、林産物二六％となっている。農業を主体としつつ、広大な山林を擁する当村にとって用材（一五％）と木炭（一〇％）を軸にした林産物は、村の経済を支える不可欠な生産部門であったことも鮮明である。ともあれ当「要覧」は、戦前昭和期の村の姿を描く際に重要な手がかりとなることは間違いない。ただ、依上村はなぜ「要覧」を作成しようとしたのだろうか、今後の課題である。（齋藤典生）

編集 大子町歴史資料調査研究会

齋藤 典生（大子町歴史資料調査研究員）
井上 和司（大子町歴史資料調査研究員）
藤井 達也（大子町歴史資料調査研究員）
藤田 貴則（大子町教育委員会事務局）
神長 敏（大子町教育委員会事務局）

発行 大子町教育委員会

大子町中央公民館内

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

☎ 0295（72） 1148

発行日 令和三年（二〇二一）三月一日